

第2章

映像を活用したタイの土器製作技術についての研究

中村 真里絵 総研大文化科学研究科比較文化学専攻学生

1. 文化人類学専攻の学生による映像制作の現況

今日は、総研大の学生による映像制作の現況について、私の体験をふまえてお話ししたいと思います。

まず文化人類学専攻の学生による映像制作の場合、pre-production(企画立案)→production(撮影を主とした調査)→post-production(編集、上映)という3つの過程に大別することができます。

そこで、これまでの問題として、以下の点が指摘できると思います。

- ①学生たちは、映像の学術的活用に関して学ぶ機会がなく、映像による研究立案や具体的手法(撮影、編集)を身につけずに撮影してきました。したがって、撮影された映像が編集されることも少なく、映像制作まで至らない場合がしばしばでした。
- ②さらに日本では、映像作品を評価する基準が曖昧で、研究業績として認められにくい現状があります。したがって、学生たちは調査に行くときはビデオカメラを持参しますが、撮られた映像が活用されていません。

そういう状況において、総研大の学生と映像の関わりについて言えば、総研大(民博)は、国内の大学、研究機関のなかで、唯一、人類学に基づく学術映像の制作について長期にわたり教育してきました。これは、総研大を特徴づける大きな一面となっています¹。

1 研究テーマがモノづくりのため、周囲には映像制作に関心を持つ研究者が多いが、実際に制作している人は少ない。先日、他大学と共催したモノづくりの展示会で、モノ、活字、写真に加え、映像展示したのは8名中2名のみ。

一般的に記録性、再現性に優れている映像制作の利点は、次のように整理できます。

- ①長期の映像制作の過程で、研究者は調査地を離れ再び研究対象と向かい合い、思考を重ねることができる。
- ②言葉では扱いきれない非言語領域(身体技法や製作技術 etc.)の表現に優れている。
- ③映像は、作品の上映を通じ、より多くの人々に対し研究成果を広く公表できる可能性がある。

現在、研究、教育の現場において、映像の学術的活用への関心が高まっており、研究成果を社会に向けて公表するツールとして、映像が果たす役割は大きいと思います。今後は、学術映像に関する、より総合的かつ実践的な知識、教育プログラムが求められるでしょう。

私自身も次に述べるように、いくつか映像を制作し、上映の機会に恵まれましたが、それをきっかけに最近では博物館などから依頼されて、映像を交えて研究成果を発表する機会や、大学の特別講義で映像と調査の関係について話す機会が増えてきているので、学術映像が研究に与える影響への関心が高まっていると感じています。

2. 映像をもちいた研究活動

次に、私自身が研究活動にどのように映像を活用してきたかについてお話ししたいと思います。

私自身の研究フィールドはタイの東北地方ですが、そこへ文化人類学の調査に行く前に、大森先生による総研大レクチャーに参加し、撮影の基礎を学びました。そして、2005年から2006年にかけて、土器製作の伝統のあるタイのダーン・クウィアン地区で、村に住み込んで調査を行いました。またその機会を利用して、土器の製作技術や職人のライフヒストリーを撮影し、調査後、映像の編集を行いました。最初は総研大イニシアティブプ

プロジェクトで映像を制作し、次に第二作として制作したのが、今日ご覧いただく『東北タイの土器生産地にみられる成形技法』(2008年、21分)です。延べ6時間くらい撮影したものを約20分にまとめています。

⇒作品上映『東北タイの土器生産地にみられる成形技法』(2008年、21分)撮影、編集、字幕、制作：中村真里絵

本作品は、長期にわたって調査研究を行ってきた、タイ東北部の土器生産地でみられる複数の成形技法を捉えたものです。従来、土器作りの技法は、それぞれの土地や民族特有のものとして一般的に描かれてきました。しかし、映像作品のなかで示しているように、調査対象地では、複数の製作技法が併存しています。こうした成形技法が併存する状況は、職人がタイ農村の社会変化に柔軟に対応してきた結果であると考えられます。

この映像作品を起点に論文²を執筆しました。映像では成形技法の具体的な提示にとどまったのに対して、論文はタイの社会的状況や職人のライフヒストリーから、成形技法の併存する状況に分析を加えたものとなっています。こうして、映像と記述の双方による総合的な研究をめざしたものです。

<質疑応答>

平田 タイの土器の成形技術の映像が詳しく紹介されていますが、技術映像として少し問題があると感じるのは、たとえば原料の土はどこから入手しているのか、製品はどのように使われているのか、など成形技術以外の情報が提示されていない点ですが。

中村 ご指摘の点は、村の全体像も含めて撮影していますが、製作工程の中で成形技術が一番社会の変化を凝縮しているので、あえてその点

2 「土器生産地にみられる成形技法と社会的含意——タイ東北部ダーン・クウィアの事例から」『タイ研究』(2008年8月)。この映像制作と論文執筆を通じて考察したものが、現在執筆中の博士論文である。

に限定して制作しました。これはあくまでも議論のための土台で、調査全体における社会の中での生産地の位置づけなどについては、別に記録しています。

平田 映像としてつくる場合は、独立した作品とするのか、論文の1章として位置づけるかの違いがありますが、この場合は、大きな枠組みの中の1つの位置づけということですね。

中村 そうですね。これ以外に、いくつかの方法でつくることも可能だと思います。粘土の入手から製品化まで一連の工程を映像化することも含めて、いろいろなパターンが可能でしょう。ただ、企画の段階で自分が一番伝えたいことは、製作工程の中の成形だったので、それを軸にしました。その結果できあがったのが、この作品です。これを発表することで、自分が考えている以上のことを読み込んでくれる人もいます。

平田 映像作品は独立して鑑賞可能なものか。それとも論文の1章という位置づけで、全体の解説を要するものか——その違いはあるでしょうね。

中村 この作品でも、全部説明することは可能だと思います。ただ、ある意味では解釈を限定させることにもつながるでしょう。映像には、視覚的にかなりの情報量があるので、見る人の想像力に委ねたいという意図も含めて、できるだけ説明情報は減らしました。一応、独立した作品として見ることも可能ですが、より正確に理解していただくためには、論文と映像のセットであることが望ましいと思います。ただ日本では、映像と論文をセットで提供する場がありません。ですから、セットではなく単独で学会誌に掲載しています。

平田 生命科学では映像学術誌を出していますが、人類学ではそういうものはないんですか。ある映像をレビューし、それが通ればアーカイブズ化して発表させるような媒体ですが。

中村 ないですね。

大森 審査基準が問題なんですね。科学映像の場合は、科学的分析ができているかどうか審査基準になりますが、人類学の場合は難しいで

すね。研究者が考えている抽象的なことは論文で発表しますから、解説なしの映像が多くなります。解説を入れると、観る人に指示を与えることになりますから。また、解説にあわせて映像をつくることにもなりかねません。自然科学の場合も、最初に論理があり、それにあわせた映像を撮影するということが起こります。つまり、論文の趣旨の補強として映像を使う発想です。それに対して社会科学の場合、あらゆる可能性があるのも、それを残しておく必要があるという認識で映像が使われていると思います。

たとえば、どういう価値があるか分からないけれども、とにかくアーカイブズ化として残しておいたところ、10年後に資料として高い価値が出てきたケースもあります。ですから、中村さんは、たくさんの映像記録のうち、流通機構などの抽象的な部分は論文で記述することにして、成形技術という1つのテーマに絞って恣意的にまとめられています。こういう手法もあると思います。

倉田 フィールドに出かけるときは、研究者、調査者はカメラを持参しますが、映像作品にしない映像は、通常はどうなるのですか。個人の資料として残るだけですか。

大森 そうですね。セルンの場合もそうでしたが、多くの人が自分の思いで膨大に撮影していますが、まとめていないんですね。結局、自分で記念に所蔵しているだけになってしまいます。これはもったいないですね。第三者に見せることを前提にして編集していかないと映像作品にはならないですね。